

にそのようなことを意味するのだらう。イブン・シーナーの研究書はこれまでに数多く出版され、本書もその一冊に過ぎない。但し著者の言う「文脈主義」、その哲学が語られた文脈に即して見つめ直すという姿勢は、イスラーム哲学研究のみならず、今後の中世哲学研究において欠かすことの出来ないものであろう。その意味で、本書はイブン・シーナー研究、さらにはイスラーム哲学研究を大きく前進させる契機を我々に提示してくれたと考えられる。

---

Morimichi Watanabe

*Nicholas of Cusa - A Companion to his Life and his Times*

Edited by Gerald Christianson and Thomas M.

Izbicki, Ashgate, 2011. xxxii + 381, Fig. 7, Maps 3

---

矢 内 義 顕

美しい装丁の本である。表紙の中央を飾っているのは、われわれがよく目にする聖ニコラウス・ホスピタルの祭壇画として描かれた枢機卿クザーヌスの肖像ではなく、バウハラッハ教会のワインの課税をめぐる紛争（1426年）に関して、法律意見書を執筆する若き教会法学者クザーヌスの肖像である。それは、クザーヌスを哲学者、神学者としてよりも、政治思想家、教会法学者、教会改革者として理解することを主要な目標としてきた、政治・法思想史の研究者である渡邊守道氏の出発点を意味する。

著者について簡単に記しておこう。渡邊守道氏は、1926年に山形で生まれ、東京大学法学部卒業後、渡米する。プリンストン大学で政治思想史を学び、1961年にコロンビア大学で博士号を取得。1963年にロングアイランド大学の准教授となり、2009年に退職するまで同大学の教授をつとめた。1983年から American Cusanus Society の会長となり（～2008年）、翌1984年から American Cusanus Society Newsletter (ACSN) の編集・発行に携わり、アメリカのみならず世界のクザーヌス研究を導いた。この間、日本でも東京大学、慶応大学などで客員教授をつとめ、日本クザーヌス学会の顧問でもあった。

著者は多くの論文を英語で発表し、それらは、*Concord and Reform: Nicholas of Cusa and Legal and Political Thought in the Fifteenth Century*, ed. Thomas M. Izbicki and Gerald Christianson [Variorum Collected Studies Series CS 709.] Aldershot: Ashgate, 2001 に収録されている。日本で出版されたものとしては、訳書に P. O. クリステラー『ルネサンスの思想』東京大学出版会、1977 年があり、日本語で執筆された論文を加筆・修正した上で一書にまとめた『ニコラウス・クザヌス』聖学院出版会、2000 年がある。

来日したさいには、日本クザヌス学会でも講演を行ない、クザヌス研究者たちと親交を深める。また 2003 年には、新潟大学で開催された第 52 回中世哲学会において、上記『ニコラウス・クザヌス』の書評会（著者コメント、特定質問リーゼンフーバー）が行なわれ、著者の豊かな学識と温厚な人柄を記憶している会員も多いことと思う。

さて、本題に入ることにする。本書の目的は序文に簡潔に記されている。第一は、ニコラウス・クザヌスに関して、専門家だけではなく、初学者のためにも役立つ案内を提供することである。このために、クザヌスの思想と行動——哲学的、宗教的、知的、政治的それ——に影響を及ぼした重要な出来事と思想に関する一連の論考が収録される。第二は、哲学者、神学者、政治家、教会法学者など、クザヌスに友好的であれ批判的であれ、彼の先駆者と同時代人たちに関する詳細な研究を提供することである。第三は、クザヌスが生き、研究し、訪れ、決断を下した、さまざまな場所を検討することである。このために著者は、それぞれの場所を、喜代美夫人とともに、実際に訪れることになる。

これらの三つの目的に応じて、本書は三部に構成される。というのも、彼のさまざまな著作を理解することは重要ではあるが、その思想の正しい評価は、彼の思想、同僚たち、そして足跡の文脈をとおしてのみ可能だからである。それゆえ、著者の確信は、クザヌスを真摯に研究しようとする者が、「反対の一致」、「可能それ自体」といったクザヌスの思想の表現を理解しようとするだけでなく、彼の思想と表現の「全体的な展望」(the total view) を求めなければならない、ということである。

つぎに全体を紹介しよう。本文に先立ち、クザヌスの年譜 (pp. xiii-xvii)、執筆年代順の著作リスト (pp. xix-xxviii)、クザヌスの肖像画・生家の写真等、さらに本書に関連する地図が配されている。著作リストには、各々の著作が収録

されている全集版の巻数、執筆年代、近代語訳等の基本的な情報も記されている。

この地図に続いて、彼の生涯、著作の刊本の歴史、研究史を簡潔に概観した序論 (pp. 1-9) があり、続いて本論になる。この本論の部分は、前述の目的に従って、69 の論考が三部に分けられる。各々の論考は、事典の項目のように、平均して 4-7 頁でまとめられ、すべての論考に詳細な文献目録が付されている。

第一部は、上述のように、クザーヌスを理解するための基本的な思想と出来事が扱われる。すなわち、教会法、大シスマ、公会議主義、クザーヌスの教皇特使としての旅行、デヴォティオ・モデルナ、コンスタンティノーブルの陥落、マントヴァでの会議、イスラーム、人文主義、新プラトン主義、否定神学の 11 論考である。

第二部には、エネアス・シルヴィウス・ピッコロミニ (教皇ピウス二世)、枢機卿ベッサリオン、ハイメリクス・デ・カンボ、教皇エウゲニウス四世、セコビアのファンなどクザーヌスに関連する人物に関する 26 の論考である。それらすべて挙げるわけにはいかないが、その中には、クザーヌスの同時代人だけではなくライムドゥス・ルルスのように歴史的な人物、さらに個人だけでなく、テゲルンゼーの修道士たちに関する論考も含まれる。

そしてクザーヌスの足跡を追う第三部は、32 の論考からなり、クザーヌスが生まれた町コースに始まり、彼が歿したトディとピウス二世が歿したアンコナで終わる。そこには、ハイデルベルク、パドヴァ、ケルンの各大学、クザーヌス・ホスピタルや図書館に関する論考も含まれる。この第三部の記述は、上述のとおり、著者自身による実地調査を踏まえており、読み進むに従って、それぞれの土地や町の風景が髣髴として立ち現われてくるだろう。

このように見てくると、本書において、クザーヌスを論じているのは序論だけであることに気づく。それゆえ、69 の論考を事典の項目のようにして——アルファベット順に配列されているわけではない——独立に活用することもできる。しかし、思想、出来事、人物、場所、これらのすべてにおいて、どこかでクザーヌスとその顔を覗かせ、最後まで読みとおしたとき、各々の項目があたかも目に見えない糸で結びつけられていたかのごとくに、クザーヌスの生涯と時代の全体が浮かび上がってくる。本書のもつ広がりとお興行きは、読者のクザーヌス理解・知識の深浅に応じておのずと異なるだろう。しかし、どのような読み方をするにせよ、読者は必ず何か貴重なものを得ることができよう。こうしたことは、クザ

ーヌスの歩んだ道を追体験し、彼の思想と生涯を熟知した著者にして、はじめて可能なことだろう。

なお、本書には他の執筆者による論考あるいは共同執筆の論考も含まれている。第二部では、「6 ジュリアノ・チェザリーニ」(Gerald Christianson)、「16 教皇ニコラス五世」(M. Watanabe and Il Kim)、「19 ラグーザのヨハネス」(John P. Kraljic)、「21 セコビアのファン」(Jesse D. Mann)、「24 トルケマダのファン」(Thomas M. Izbicki)、「25 ヤノス・ヴィテズ」(John P. Kraljic and M. Watanabe)、第三部では、「23 ヒルデスハイム」(Donald D. Sullivan)、「28 ピウス二世の下でのローマ」(Thomas M. Izbicki)がそれである。これらの執筆者は、著者がこれまで歩みを共にしてきた研究者たちであり、ジェエラルド・クリスチャンセンとトーマス・イズビキは本書の編者でもある。このことは、著者が長年にわたり、アメリカ・クザーヌス学会を導いてきたことの証でもある。

第三部の「6 トリアとザンクト・マティアス大修道院」は、同修道院の修士・歴史家ベトルス・ベッカーに献呈されている。著者がトリアで研究調査中に会った友人だからである。さらに、この第三部の「29 クース：養老院」の最後には、ベルンカステルのワイン・リストが示され、中でも最も有名なBernkasteler Doktorについても説明されている。これらの一つ一つの配慮にも著者の人柄が偲ばれる。

本書の論考のうち、第二部、第三部に収められた論考の多くは、1984年2月から2007年11月までの23年間にわたり、上述のアメリカ・クザーヌス学会のニューズレターに連載された論考を改稿したものである。それから2011年11月の出版までに4年、つまり、27年の歳月をかけて、本書が完成されたことになる。多くのクザーヌス研究者が、本書の完成を心待ちにし、その出版を心から祝福した。本書が、クザーヌス研究者にとって必携の書物(Companion)となったことは言うまでもない。

著者・渡邊守道氏は、クザーヌスの研究者のみならず、中世・ルネサンス思想の研究者たちにとっても、この上なく貴重な贈り物を残して、2012年4月1日逝去された。